

# 鯨 研 通 信

第 321 号

1978年12月

財団法人 日本捕鯨協会 鯨類研究所 〒135 東京都江東区越中島1丁目3番1号 電話 東京(642) 2888 (代表)



## 鯨史巷談(7)

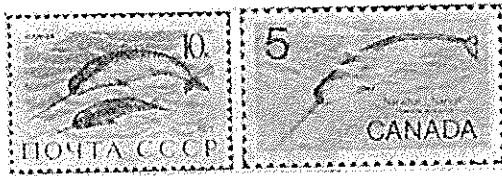
### うにこうる奇譚(下)

黒潮資料館 矢代嘉春

江戸時代のうにこうるをめぐる小論を読んで下さった読者は原点の欧州ではどんなことであろうと想いを残した方が多かったに違いない、人一倍物見高い筆者もその想念熾烈なものがある。

然し日本でさえ忘れられてはや百年、ましてや先進文明のヨーロッパのことだ。余程の物好きでない限り知る人もあるまい、これを調べるには学際的に広く深く網をはり廻らして十年と長期抗戦を覚悟していた処へ、我が偉大なる師匠大村秀雄博士より意外な教示を戴いた。

——オランダ人がグリーンランド鯨と共に捕獲していたのですがソ連とカナダに多く此の両国は切手の図案に使っています。御参考迄にその写真を同封しました。カナダは1968年、ソ連は1971年に発行しました。その牙はユニコーン(頭によじた角を持つ神話の動物)の角として天井知らずの値段で売られていました。捕鯨業者の悪徳のしからしむる処です——。



うにこうるの切手

これには驚いたのである。予想とは全く逆にヨーロッパでは堂々と現代に君臨し然も国家の象徴と迄なっている。これはもうただごとでない。

筆者の文化史観によれば神代より現代に到る迄生命を維持し続けるという事はそれが人間の原点から発し原点に生きつつあるからである。原点とは何ぞや? 原罪のことだ。はっきり言えば性欲と食欲と宗教——この三点に密着したものでない限りその生命は借物で

あり有限だ。日本のうにこうるが馬脚を現したのもそのいづれにも定着し得なかったからである。もしも一夜数十騎乗も可能という原罪への希望があれば御本家同様の権威を維持しつつけたに違いない。して見ると彼地のユニコーン研究は意外に進んでいるやも知れない。これは有難し、さればとひざを正したトタン偶然がおとずれた——ことは前書きで述べた通りである。

そこでその偶然の使者波沢竜彦なる西欧博物学者を紹介せねばならぬ。此の人はヨーロッパ美術の鑑定と評論には名のあるフランス学者で、その底には夢と詩が色こく潜在し独特な語り口はいつの間にか我等を夢幻の想念にさそい込んでしまう。上等のコーヒーかワインかいやエキゾチックな魔薬でもかがされた気分となる。江戸時代に遠近法で画かれたあの浮き絵を見せられた気分かも知れない。

彼は此の度その随想集をまとめた「記憶の遠近法」なる一書を出版した。あと書きに「望遠鏡をさかさまして世界を眺めるようにして想像上の動物や宝石やエロテインズや奇玩などを主として書いた」とある。

早速に一本を求めた事は申す迄もないが何とその第二章に「一角獣について」なる論考がある。うにこうるなんて奇物を愛する人物は私以外はあるまいと変な自負を持っていただけに目をこすったのである。

いや私より遙に学問的で光線画的でよりうにこうる的である。ただいいことに私が日本を中心に追求したのに対し彼はそれには全く関係なく、私の手のとどかぬ西欧のそれである。

かくして歴史研究誌(53年6月号)に発表した拙論と編成すれば世界のうにこうる史は一応完成するわけで、これはもう感謝というか感激というか目のよる処に瘤とはうまいことを言った、うにこうるの角も一種の瘤ではないか。

## 一角獣の超能力

一角獣がいつ頃から西欧の社会に君臨したかという  
と紀元前四世紀の後半にペルシャ軍に捕われ王の侍臣  
となったギリシヤ人のクテシアスという怪人物が、そ  
の旅行記「インデイカ」の廿五章に発表したのがそも  
その始まりと渋沢は言う。

インドに馬位の大きさの野生の駿馬がいる。額の上  
に一本の角がありその長さ50センチに及ぶ。この角  
の基底は純白で中央部は黒く短く先端は鮮紅色を呈  
している。

次いで一角獣を語ったのはギリシヤのオピアノスと  
いう怪人で(二世紀後半) 三本の角があると言ってい  
るが、一角獣が三角獣になってはこまるがそこが神獣  
の所以だ、我慢しておきましょう。

次いでブリニウスという博物学者は次の様に説いて  
いる。

「——インドの最も野生の獣はモノクロス或いはウ  
ニコルス(いづれも一角獣のこと)でそれは馬の体  
鹿の頭象の足踏の尾をしており啼き音は低く、額の  
中央に生ずる一本の角はほぼ一米もある。この獣を  
生け捕りにする事は不可能である……蹄は牛の様に  
割れているのもあれば馬の様に蹄も必ずしも  
一定しない……」

棲息地はインドという説が多くエチオピアという修  
道僧のコスマスがあり、マルコポーロはスマトラの北  
岸という。

その性質は人間に馴れず食物を与えてもこれを拒絶  
しついに餓死するという。流石に神獣である。肉味は  
苦味ありとするもの甘味というもの様々だ。

此のへんからそろそろ思い当るふしが出てくる。角  
が無ければ此の獣キリンではないのか。ビールを飲ん  
でいるうち悪徳商人に角を持って行かれてしまったの  
かも知れないゾ。我が師大村博士の提供された彼地文  
獣のさし画はそれを語るに十分である。



ユニコーンの図

欧州の貴族の楯形紋章寺院の石垣、軍談にも挿絵に  
も一角獣のデザインが盛に出てくるのは此の時代から  
という。

中世の頃迄はまだその実在を信じその長い左捲きの  
霊物は貴族達の特権を表徴するシンボルとして、今で  
も彼等の遺物博物館や宝物館に数多くのこっているこ  
とは後に述べる通りだ。

アラビヤの伝説によるとその角は透明で螺旋状をな  
しピカピカ光っていてこれをタテに割ると人間の形や  
鳥の形、樹木の形なぞ根元から先端迄精巧に彫ら  
れているとある。

何とも不思議な事だが美事に旋盤でけずりあげられ  
た様に美しい左捲きの形成を見ているとその様な幻  
想が浮び上ってくるのかも知れない。

## 騏足が馬脚に

一角獣の実在が疑われ出したのは多分十六世紀の後  
半からだろうと渋沢は言う。数千年もつづいた奇聞異  
事の一つ一つ検討し根拠の無い事を証明したのはフラン  
ス王家の侍臣、外科医「アンブロワズバレ」という  
学者で彼の「ミイラの毒一角獣及びベストに関する  
説」が出たのは1582年というから日本の戦国時代だ。

その百年後にはスイス生れのイエヌズ会士アタナシ  
ウス、キルヒヤーが大著地下世界(1664)のなかでヨ  
ーロッパ諸王家の私設博物館に展示されてあるのは実  
は或る種の海獣の歯に過ぎないという事を暗示してい  
る。1664年といえば寛文四年四代将軍家綱の時代、禁  
教令のあった年だ。

ではこの一角獣という空想上の動物が生れる素地は  
何であったろうか。これは渋沢も私と同じように東南  
アジアやインドの犀であろうと言っている。理由は簡  
単一本角の動物は犀しかいないからだ。

西欧見聞記にも「一角獣の敵は象とドラゴンで小鳥  
との間には友好関係があり、鳩が巢をつくる下に好ん  
で休みに来る。鳩の鳴く音が好きで角の上にとまっ  
てもじっとしている」

とあるがこれも甚だ示唆的で犀や河馬の脊で虫をと  
ってやる小鳥のいるのは有名である。

## 霊力と伝説の素地

インドには一角獣の角でつくった盃を珍重する習慣  
があり毒を入れれば忽ち割れるという。フランス王シ  
ヤル九世やベリー公なぞいつも酒盃の中にその角の  
小片をひたしておくそうで、オリエントの君主達はその  
角でナイフの柄をつくらせ毒のそばに置くとしつと  
りと湿り気をおびてくると信じていた。

カルル大帝の頃回教王ハルンアルラシットから贈ら  
れたというその角はフランス王家の宝物として永い間

パリのサントン修道院に保管されていた。現在クリコナー美術館の所藏品となっているが長さ2米20センチもあり復活祭のローソクの様だとある。

ハブスブルク家の宝物としてウインの帝室博物館にあるのはそれよりも更に長く2米42センチもあったという。

ヨーロッパの王侯貴族は莫大な金に物言わせて入手に狂奔したために領地を売りとばしたものを抵当に入れたもの迄があり英国のエリザベス女王のは何時価一万ポンドと評価される角を寝室においたそうでオーストリアのマクシミリアン皇帝は剣の握りを製し大得意だったという。

ドイツ皇帝カルル五世やブルゴーニュ公の財産目録の中には黄金や宝石をピッシリとちりちりばめた一角獣の水差しやコップが幾つも記録されている。

これが海獣の牙に過ぎない事を始めて解したのはオランダの動物学者ウオロミウス、それにハンブルグの旅行家フリードリヒマルテンスで十七世紀に入ってからという。日本の元禄時代である。

然しヨーロッパでも完全にそれとわかるのはまだ一世紀も先きのことでポーランドやロシアでは十九世紀でも非常な価格で取引さされていたという。1775年(安永3年元禄から約80年後)に来たツェンペリーが大儲けしたのは無理がなかった。

ポーランドやロシアという産地に近い国々で馬鹿値で取引されていたというのはうなづけないがピョートル大帝の父アレクセイが迷信深く莫大な金を支払っていたからという。

## 神 獣

うにこうるつまり一角獣が神獣たるの証明はこれを生け捕りにする方法でよくわかる。此の神獣は無敵の強さをほこっているがただ処女だけは弱い。

そこで猟師たちは罠として森の中へ処女をつれて行く。処女の匂いがこの獣をひきつけおびきよせるのだ。

フィリップバタオンはその動物誌(十二世紀)のなかで「処女はその肌着のホックをはずして乳房の一方を露出させておく。すると一角獣が近づいて来てその頭を処女の上のせすっかりおとなしくなりそのままとうとうと眠ってしまう。そこをねらって猟師達は難なく捕えてしまう。

然し処女でない一角獣は忽ち見破って食い殺してしまう。それで処女達の自己証明はうかつに信じてはならぬ——なぞと渋沢は言っていないが気をつけなくてはならぬ。

こうして西欧に於けるうにこうるに関する文学や美術の根本理念は近世に入って、「一角獣と貴婦人」と言うテーマにしぼられ有名なるクリコナー美術館の壁織物に象徴されているという。

これを見て大いなる啓示を受けたのがキリスト教の智者達で、それと言うのもマリア様の無原罪懐胎という非科学的な現実の説明に窮していたからだ。これはお釈迦様も同じで俗人から生れたではどうにもうまくなく、まや夫人の脇の下から生れた事にしてしまった。

キリストなぞも京童の口さがなき、ありアててなし子さと大工の女房の不行跡にしてしまった。

そこで処女の膝に抱かれた神獣の角はマリア様への神の言葉を書いた神の体の部分であり、処女を受胎させ得る神力を持っている、ユングによれば大天使ガブリエルによって追われた此の神獣がマリアの胎内に庇護を求めたものと拡張解釈し、つまりここで聖母の無原罪懐胎が理論づけられたという。シンボリズムの構造としてこれほどすっきりした比喩はあるまいと渋沢は言う。

キリストの動物誌(1940年)を書いたシャルボノーラッセによれば「一角獣と処女と狐師の伝説は神の子の受肉と贖罪の為の犠牲を表現するに最も適したテーマであり、一角獣は人間の胎内に降りてきたキリストの象徴的なイメージとなり」と此の事を裏付けている。

こうして彼地のうにこうるは宗教にむすびついたから生命は永遠となる。然し残念なことにはあちらにも川柳や小咄を好む市民や戯作者が多く彼等はこの神聖なる神話を茶化してもっぱらエロディンな人獣交媾のイメージにかえてしまった。

グスタブネボッケなる戯作評論家は「迷宮としての世界」の第五章で

「一角獣は単なる奇妙な神話でなく典型的にエロティックに変形された神話となる。その神経質でふるえるようなデッサンに男色の隠喩を見ようとした人もある程だ。しばしば生命力の欠如に悩んでいるように見えるマニエリスト達にとって原始的な荒々しい一角獣は一つの幻覚的な補償のイメージだったに違いない」

こちらあたりが渋沢の遠近法的敘述だが、はっきり言えば、フアリックシンボルであり、男性の不能と女性の欲求不満の間接的表現である。

かくして男性不能という老いたる男性のセックスに根ざしたうにこうるはピアズレーの未完の小説「ウエヌスとタンホイザー物語」のなかにアドルフという名

で登場する。アドルフは女主人に熱烈に恋し毎朝彼の手から葡萄パンの朝食をたべさせて貰うばかりか女主人の乳房を吸い芝生に横たわって自分のフアロスを愛撫して貰う。

こうして世紀末の芸術家達の手によって一角獣はその本来の純潔や強猛性を失い、もっぱら淫蕩な貴婦人のお相手をつとめるエロテックな獣にされてしまったかの如くである——。

以上が波沢論の解説であるがこの中にやたら出てく

る芸術家や作品の名は筆者甚だ苦手だ。どうもいささか逆さ眼鏡的な処が見えるが篤志家は著者に直接聞いて頂きたい。

ただここで我らがうにこうるをたたえたい事は彼が再び神獣の座に復帰し、かつての産出国の象徴にカムバックしたことだ。彼は正に不死獣であり神獣の名をけがすものでない。これを混屯たる今世紀の文化にどう位置づけるかこれはもう私達俗物の論ずべきことではない。波沢でさえ投げ出している。

## アメリカ捕鯨船暴動事件

### グローブ号深夜の惨劇

泉 史 郎

最近、アメリカ捕鯨史を調べていたところ、C. W. Ashley の *The Yankee Whaler* (1938)、A. H. Verrill の *The Real Story of the Whaler* (1929)、および E. P. Hohman の *The American Whaleman* (1928) の三著書のいずれにも、“事實は小説より奇なり”、という言葉が使われていることに気がついた。“事實は小説より奇なり”、とは、小説は空想の産物であるから、われわれの思いも及ばぬような事実が存在することを指しているのである。その奇なる事実の受けとり方は、もちろん、人により、時代により、また国によっても異ってくるだろうが、正直に言って、筆者も大いに好奇心を刺戟され、それがため、大部で、むしろ退屈なデータの羅列の多い原書に、なんとか目を通すことができたようなわけである。

そして筆者は、アメリカ捕鯨船で発生した暴動も、その奇なるものの一種ではなからうかと思った。というのは、漁業に従事する船員の共謀による人身殺傷事件が一度ならず発生することは異常であり、これを誘発せしめた操業形態も特異面を有していたに違いない、と考えられるからである。

しかし、そう思っただけで、よく考えてみると、この認識は、少々怪しくなってきた。というのは、アメリカ捕鯨の実態を調べてゆくにつれて、何か、そのような事が起りそうな節が感じられるからである。その蓋然性の具象化したものが暴動であったとしても不思議ではない、言いかえると、この場合、暴動には純粋な意外性が薄く、奇なる事実とは、意外性を100%満たすものでなければならぬだろう。しかし、今のと

ころ、そのようなものが未だ見つからないので、ひと先づ、暴動を奇なる事実として、取上げることにした。

さて、アメリカ捕鯨で、暴動の事例は少くないが、ここでは、もっとも血生臭い惨劇とされている捕鯨船グローブ号事件について誌してみたいと思う。もとより、これは鯨の生物学でも、資源論でもない、鯨という単語さえ、あまり出てこない文章である。いわばアメリカ捕鯨の裏面史にかかわる捕鯨拾遺とでもいうべきものであろうか。

#### 事件の経末

悲劇の捕鯨船グローブ号は、ナンタケット船籍で、1822年12月19日、T. ワースを船長としてマサチューセツ州のエドガータウンを出港した。翌年5月、サンドウィッチ諸島（今のハワイ諸島）のオーハウに、補給のため、積荷を終えて、on Japan 漁場へ向った。同年12月再び寄港した。ここから漁場をへるためであったが結果的には運命の岐路になってしまった。

このとき、6名の船員が脱走し、また1名を解雇したので、その補充のため、“浜をうろついていた”男6名を連れてきている。同船が、1823年12月29日サンドウィッチ島のホノルルを出港して、1週間もたたない、その日、オーハウから連れてきた新参者のトーマスが、船員たちの目前で、“愛の鞭”だと称して、ロープ打ちの懲しめを受ける事件があった。この光景は、船員たちの恐怖心をかきたて、“こんな船は我慢ができません”と、つぶやきながら、その場を立ち去っ

た、という。

また、このワース船長は、船員たちの食事時間を、口やかましく制限したので、かねがね、反感を抱かれていた。

こうした険悪な空気のなかで、恐ろしい暴動の埋火が、急速に勢を増して行った。暴動の主謀者は、S.B. コムストックという弱冠21歳の、ナンタケット出身の青年で、かれは、ボート（キヤッチャー）の操舵手（鋸手を兼ねる）で、仲間に、“浜”の新参者ペイネ、オリバー、トーマスのほかハムフリス、リリストンらを引づりこんだ。

1824年1月25日（スターバックによる；スタックポールは、26日としている）、その夜グローブ号は、ニューベッドフォードの捕鯨船リラ号と道連れ航海をしていた。ボート操舵手が、夜の最初のワッチにつくのが習慣だったので、コムストックは甲板に上ってきた。船長は、船が間切り（on a tack）に来たとき、ランターン信号を使え、と最後の命令を下して、かれの船室に帰って行った。曇がりやの彼はハンモックを吊し、そこで、やがて深い寝りに陥った。ちょうど夜半前の時刻である。船内は静まりかえり、ただ、舳で碎ける波の音、とぎれとぎれに吹きつってくる風の音だけは、いつものとおりであった。三更の夜空を切って、不吉な前兆のように、流れ星一つ消えて行った。

その時、機をうかがっていたコムストックは、共謀者たちに目くばせして、仕官専用のキャビンへ導いて行く。キャビンのドアは、かたく閉ざされていた。ハンフリスにランターンを持たせ、コムストックは船長室へ足音をしのばせて近づき、風のように入るなり、いきなり、有無を云わせず、鋭い手斧を、船長の頭上に撃ちおろした。グググッと、しぼるような呻き声とともに、ザクロのように口を開いた頭から鮮血が飛び散る。返り血を浴びたコムストックは、悪魔の形相すざましく、二の手、三の手と強打を続けた。完全に息の根のとまるのを待って仲間のペイネの方へ急いだ。かねて打合せのとおり、そのペイネは、一等仕官室のドアを開けて入るなり、問髪を入れず、睡眠中のビートルを、ナイフで刺していた。

致命傷を脱れたビートルは目を覚まし、負傷にめげず、

“これは、いったい何っ、何っんということだ！ ペイネ、コムストックよ、おれを殺さないでくれ！”

と訴える。それをさえぎるように、コムストックは、“そうだ、お前は、いつも、ごろつきだった。このおれに嘘ばかりほだきやがっただろう！ 命乞いするの

は今のうちだが、もう手遅れだ”

と形相すざましく追って行く。その時、ビートルは窮鼠猫を噛む勢で、コムストックの咽喉もとに飛びつき、必死になって首を締めようとし、明りを突き落した。と同時に、コムストックの手から斧が滑り落ちた。“斧だ！ 斧だ”

とわめく。ペイネが手探りでそれを見付け、かれの手に渡す。コムストックは、ビートルの頭を滅多打ちにする。頭蓋骨は割れビートルは、どっと床に崩れ落ちた。なおも、とどめの一撃を加え、惨殺体は一つ増えた。スチユワードのハムフリスは、この間、明り持ちをし、オリバも積極的に加勢した。

二等仕官（ラムバルド）と三等仕官（フィシヤー）は、この惨劇の間、かれらのベッドの中で息を殺して聞き耳をたて、ひたすら、わが身の安全を念じていた。ビートルの始末をつけたコムストックは、二等仕官室の前に見張りを残して甲板へ上って行った。そこで羅針儀盤に明りを入れた（船の運航状況が気かりだったのだろうか、クールな男である）。

以下の“わたし”は主謀者の弟で、当時16歳の少年G. コムストックのこと、彼は後、暴動の経過に関する手記を提出させられている。

兄が甲板に上って来た時、わたくしは、

“今1人のボート操舵手のスミスは殺すのか”と尋ねた。

“そのとおりだ。奴はどこにいるか”

と鋭く問い返してきた、ほんとうの事を云ってしまうと、直ぐにも殺しに行くと思ったので、わたしは恐しさに震えながら、

“見かけなかった”

と云ってしまった。実の処、今しがた艦の方で、彼と話を交していたのであったが。兄は、わたしが涙を流しているのに初めて気付いたように、

“どうしたのだ”

といぶかるように顔をみつめた。わたしは、今に、わが身にもふりかかってくるかも知れない復讐の危険におびえていた。

“そんなことは心配せんでもよい、おれに任せておけ”

と云い残して、再び、キャビンの方へ、そそくさと引きかえして行った。

彼は、そこで明りをつけて、ラムバルドとフィシヤー襲撃のため2丁のマズケット銃に装弾した。そして、その1丁を以て、かれらの居室のドアの外から発砲した。その1弾がフィシヤーの口に命中した。暴

徒がドアをぶち壊やし、真先きにコムストックが乱入したとき、かれは、バリエードにつまづき、その刹那、ラムバルドにタックルされた。気丈なフィッシャーがコムストックの手から銃をもぎとり、いきなり、かれの心臓部に銃口を向ける。が、コムストックは落ち着き払って、

“銃を手放すなら、お前の命は助けてやる”

と鋭くにらみ返した。この瞬間は、正に運命の転機であった。悪運の強いコムストックを生かし、その代りに、さらに2名の命を奪うことになった。その瞬間、フィッシャーは、ドアの外に一瞥を投げた。そこから身の気もよだつような異様な光景が目に見えこんできたのである。ワース船長の死体から手足が、だらりとハンモックの外に垂れ下り、赤く血ぬられた果肉のような頭がそこにあった。鬼気迫る妖気に包まれた惨殺体が、フィッシャーの気を転倒させ、云うに云われぬ恐怖心がフィッシャーの身中を走った、思わずコムストックに銃を手渡ししてしまった。銃をとり返したコムストックは、今しがた云った言葉の舌の根もかわかぬうちに、

“覚悟しろッ”

と云い放った。フィッシャーは、

“覚悟はできている！ 貴様のような卑怯な真似はせぬ！”

と、コムストックをにらみつけながら、後向きになる。マスケット銃は、かれの頭部を狙って火を吹き、音を立ててフィッシャーの身体は床に倒れた。

一方、ラムバルドは、銃剣 (bayonet—スタックポール；ヴェリイルはランス (whale—lance) で刺したと語している) で刺され負傷していたが、コムストックに命乞いをしつづけていた。

コムストックは、

“お前は残忍な奴だ、仇を打ってやる”

と一喝して、またしても、かれの体に剣を突き通した。苦痛をこらえながら、水を呉れ、と哀願する、水をやると、また刺した。とどめの積りであったのだろう。しかし奇蹟的にも夜明まで生き延びていた。そして甲板へひきづって行かれ、舷側から海へ投げ込まれた、と思ったが、かれは想像もつかないような生命力で舷側にしがみつきぶらさがった。これを冷ややかな顔で見つめていたコムストックは、突然、しがみついている、ラムバルドの手の指をいやと云うほど踏みつけ、蹴りつけ、とうとうラムバルドの体を海中に落してしました。海に落下したラムバルドは、不死身のようになり、しばらく泳いでいたが、やがて力尽き波間に

姿を消した。

惨劇後2日経過した。その日、またまた、むごい虐殺が行われた。それは、一味のステワードのハムフリスが、キャビンで、ひそかにピストルに弾をこめている処を弟のコムストックに見付けられてしまった、のが事の起りであった。弟からの報告を受けた兄のコムストックは、直ぐ連れて来いと厳令した。ハムフリスは周章狼狽した。そして必死になって、かれの命が狙われていると聞いたので自衛のためだったと弁解につとめた。このネグロは、恐らく自責と恐怖のため気も転倒してしまっていたのであろう。コムストックは直ちに絞首刑の準備を命じた。かれの首を前踏機柙のロープに縛り、ロープの他端を一味が握って、ベルの合図とともに艦の方へ駆け出せ、と指図した。その時、哀れはハムフリスは“自分が生まれた時、誰が、このような目に会うことを考えただろう”と最後の怨言を残し、ベルが打たれ、ロープが伸びて、ハムフリスの重い身体は、前踏機柙の下の空間に宙吊りのまま動かなくなってしまった。

大虐殺の後、コムストックは、生残者たちをキャビンに閉じこめ、そこで、放歌高吟、どんちやん騒ぎに興じたと云う。その光景は、吸血鬼、殺人狂たちによる、異様な宴であった。夜な夜な犠牲者の亡霊が枕頭に現われると弱音をはいく者もいたが、コムストックは幽霊が出るなら何度でも殺してやる、といばかり散らした。

船長、三人の仕官そしてステワードら、5人の惨殺体で血塗られたグローブ号は、コムストックの指示に従って、1824年1月25日、東マーシャル群島のマルグレブ島に到着した。

ここで離船、上陸後、コムストックは船の積荷を陸揚げさせた。そしてグローブ号は焼却しようとした。しかし、船の焼却については、強い反対者も出、特にペイネは強硬に云い争った。一味の中に、しこりを残しながら島の生活がはじまる。しかし、ある日の午後、ペイネはオリバーとしめし合せて、原住民の村から帰ってくるコムストックを待ち伏せ、殺害してしました。1924年2月16日のことである。暴動発生以来、わずか1か月半にして、主謀者コムストックは、その夢(後述)とともに葬り去られ、ドラマの第2部は幕をおろした。

コムストックの死後、ハワイのごろつきペイネとオリバーが生残船員の支配権を握ったが、オリバーは酒に酔いしれ、ペイネは、ペイネで、土民の娘をかどわかし、強奪して来るなど、乱行、目にあまりあるもの

ばかり。土民たちの反感が広まって行った。

そしてある夜、土民らによる盗難事件が、きっかけとなって、棍棒、槍、石などをたずさえた土民の大襲撃となり、衆寡敵せず、ペイネ、オリバー、トーマスら暴徒のほか、罪のないコフィン、ワース、ブラウンなど、ことごとく殺され、助かったのは少年のレイとハセイの二人に過ぎなかった。

しかし、この時、グローブ号のガードのため船に送られていた暴動に加わらなかったボート操舵手のミスは、キダー兄弟、ハンセン、トーマス、弟のコムストックらと、ひそかに逃亡を謀議していた。土民の蜂起に気付いた一行は、躊躇することなく船の係留索をたち切った。これら6名は操船も意のままならぬまま、苦しい航海を続け、1824年6月7日、波高い太平洋を乗り切り、ようやく南米、チリーのバルパライソに到着、悪夢の航海を終了した。ここで、かれらは、ホーゲン領事の取調を受け、当時、在港の米艦がいなかった関係上、身柄は、ひとまずフランスのフリゲート艦の監視下におかれた。その間、ホーゲン領事は、キング船長、その他の船員を補充して、グローブ号の母国送還を手配する。かくして、同年7月、バルパライソ出港、魔のホーン岬も無事通過して、11月14日、エドガータウンに錨をおろし、1824年11月24日にナンタケット港に、変り果てた船影を現わした。

### アメリカ海軍による捜査

グローブ号と、その一握りの生残船員たちの帰還は、事件の、今一つの局面に焦点を転じた。それは、マルグレブ群島に潜伏する暴徒の残党の逮捕と生残りの犠牲者らの救出問題であった。事態は急転した。グローブ号帰還後、直ちに、救出の要請がワシントンへ速達され、海軍長官サウサルドの命令が、南米西岸にいたハル提督のもとへ5月初旬到着した。その結果、ようやくしてアメリカ海軍ドルフィン号を8月18日、ペルーのチヨリロスを出港、現地に向って急行させた。

同艦は、ガラパゴス、マルキーズ諸島経由で孤島カロリンへ向った。そこから数か所を捜査して、11月19日にマルグレブに到着。ここで初めて、グローブ号の寄港、残党の上陸を確認することができたのである。諸島巡りをしているうちに、一つの島で、船員用の箱、焼け棒などグローブ号の用品のほかに、コフィン船員の名前入りの手袋などが発見された。さらに、ジャングルに踏みこむと、数百枚の、牛肉や豚肉を入れていた桶の板が散乱していた。その傍に、主謀者と推

定される骸骨と、スペイン貨幣の入った箱まで見つかった。これらは、もはや疑う余地のない証拠であった。

だが、生存者たちは、今どこにいるのだろうか。探索隊は緊張した。早速、軍艦ドルフィン号から12名の武装兵を乗せたランチが準備され、ポールデング大尉の指揮下におかれた。その時、土人の大群集のいる小島が発見され、ランチが、この島に接近、波打際近づいた時、群集の中から、土人のような衣服をまとい、一種異様な風体の男が飛び出し、英語で叫びだした。“インデアンが危い上陸には気を付けてくれ”

と云っているようである。ポールデン大尉は、一行が探し求めている人物に違いないと確信したが、この男が暴徒の一味か、無実の犠牲者か判断しかねた。大尉が名前を尋ねると、

“ナンタケットのグローブ号のレイです”と叫んだ。彼の体つき、若者らしい身のこなし方などは、一行の抱いていたイメージに一致した。そこで、“ランチの方へ走って来い！ 擁護してやる”と告げる。

“ここまで行くうちに殺されてしまう”

と応じようとしなない。ポールデン大尉は決断した。従兵らに、ピストルの威嚇射撃をさせながら、一気に上陸を敢行した。居並ぶ土人たちに銃口を向けつつ、この若者を詰問したところ、

“貴官の部下です”

と涙に濡れた童顔で、大尉を見上げた。大尉は、土人たちに、おとなしくしないと皆殺しにすると告げさせ、かれらの中から、この若者レイを無事救出することに成功した。そして、このレイの口から、今1人のナンタット出身のハセイが、他の島に、捕虜になっていることが判った。レイ釈放の情報の洩れることを慮った大尉は、直ちに目指す島に急行。處をついて上陸、土人村を急襲して、一人の尊長を捕えた。この尊長によって白人の捕虜が、連行され、大尉に引き渡された。

かくして、この豪胆な大尉の機敏な処置により、2人の生存者は救助され、他の残党らの消息も明らかにされたのである。

レイとハセイの2人を収容したドルフィン号は、1926年7月23日、南米のヴァルパライソに到着した。ここで両人は、フリゲート艦ユナイテッドステーツ号に移され、1827年4月21日、母国合衆國に帰ってきた。

この両人の生還が発表されたのは、グローブ号帰港、約2年後であった。かれらの身体には、首から脚

まで入墨され、島では奴隷の生活を強いられていたことを物語っていた。懐しい母国の土地を踏み、父母や友人たちのいる温かい家郷へ、生きて帰れた感激も、つかの間であった。突然、2人とも郷里から姿を消してしまった。そして再び帰ってこなかった。また首謀者の弟コムストックも、ナンタケットを出奔してしまった。暴動は、後遺症として、生残者にも、このような暗い運命を背負わせてしまったのである。

### 暴動の動機と予後

さて、この暴動の張本人のコムストックは、1802年、ナンタケット生れ、父は有名なクエーカ学校の校長を勤め、後パンフィク銀行の支配人となった、つまり名門の子弟であった。彼自身は、ナイン・パートナーズ学校卒業後、13歳の時、エドワース号に乗船して、ニューヨークからリパブルへ航海している。そして1817年初めて捕鯨船に乗ったが、チリー近海で海賊の掠奪事件に遭遇した。翌年、フォスター号で、太平洋南方の未知の水域に出漁したが、この時、南海の孤島で、彼の王国を建国するという途方もない妄想の慮になってしまったらしい（かれは上陸を求め船長に拒否されている）。そして、この一青年の妄想がエスカレートして、あの恐ろしい暴挙を犯してしまった、と伝えられている。

グローブ号の暴動事件は、平穏な漁業を震駭させ、多くの波紋を投じた。まづ捕鯨船は、太平洋上では、浮動する合衆国の微小財産であるが、船が、ひとたびペルー海岸を離れると、合衆国政府の保護の手から完全に離れてしまう、という事実を公知せしめた。

また軍艦ドルフィン号は、その救助活動によって米國海軍の威信を國民に示したことも付け加えなければならない。さらに捕鯨船の船主たちから、ボート操舵手の夜間ワッチは禁止すべきだとの声が出た。これは今回の暴動主謀者が、たまたまボート操舵手であった為で、その激務の緩和まで考えたものではなかったようだ。この暴動発生を契機として、ボート操舵手の問題を、さらに掘り下げて検討すべきであった、それは、アメリカ捕鯨のより重大な問題にかかわっていた、と考えられる。

これに対して、メルヴィル（“白鯨”—阿部知二訳）の適切なコメントを引用しよう。

……短艇が漕ぎ出す際には、短艇長つまり鯨を仕止めるものが、臨時の操舵手になり、鋸手は鋸手權（1番權）をこぐことになる……

追跡がいかに長時間にわたり、疲労がいかにげし

かろうとも、鋸手は、その間全力を尽してこがねばならぬ。ところが彼は、ただその非凡の潛力だけでなく、たえず不敵の大叫声をあげることによって、その超人的活動の範を衆にしめさねばならぬ。

……鯨に背中を向けての、この奮起叫喚の中において精根も尽きたかの鋸手は「立て！ 一発打ちこめ！ との昂奮の叫びをきくのだ。たちまち彼は權を手放して静置し体を、くると半廻転させ、又柱から、おのれの鋸を取り、残んの精力を絞って何とかして鯨に向けて一擲する。これを思えば、全捕鯨船団を総合した場合にも、投擲の好機五十回のうち五つも成功はないということも、多くの哀れな鋸手らが手ひどく罵られ貶されるということも、彼らのあるものが艇中で血管を破裂させてしまうという事実にも、またマッコウ漁船中にも、4年も海にうろついて四樽しか取らぬものがあるということにも、多くの船主にとっては捕鯨は割に合ぬ商売だということにも何らの不思議はないではないか。そもそも捕鯨航海とは鋸手あってのものであり、そいつの全身の精気を絞ってしまったとすれば、いざという場合どうして埋合せができるというのか。さらにまた一擲が成功したとしても次の危急の一刹那、つまり鯨が疾駆し出すとともに、短艇長と鋸手とも、また……前後に走り出すというのは、この時彼らは位置を代るのだ……捕鯨の失敗中の絶対多数は、決して鯨の速さによるものではなく、前述のごとき鋸手の消耗によるものである……

ボート操舵手（または鋸手）の超激務ぶり、まことに叙してあますところがない。古くから、この操舵手は、不明確な地位に置かれ、前櫓船員、つまり一般船員とキャビンの仕官たちとの中間的な位置づけになっていた。かれらは、体力抜群で、投擲の技術をマスターし、かつ冷静豪胆でなければならない、という一種特別の人種で、船内では尊敬され、その地位は確保されていたのであるが、下仕官としての身分は剝奪されていたのである。

若くして乗船の経験を積み、操舵手に選ばれたコムストックの胸底にくすぶっていたであろう、不平不満が、彼を恐るべき暴挙に走らせ、暴動の引金を引かしてしまった。と考えられないだろうか。コムストックの暴動のニュースが、ニューヨークの父ナーサンに到着したとき、かれはナンタケットの親族に手紙を送った。その中に、

“おー、サムエル！ サムエルよ、神はサムエルを見捨てられた！”

と、痛恨の親心をしたためていた。